

卷第一 述太陰病

太陰病者、裏寒實證、是也、蓋其人内有_二久寒_一、倘遇_二邪客_一、雖_二初得_二陽證_一、及_二其入_レ裏、則遂從_二寒化_一、而胃氣猶有_レ守、故能搏實者矣、

太陰病は、裏寒實證、是也、蓋し其人内に久寒有り、倘_{もし}邪客に遇えば、初め陽證を得ると雖も、其裏に入るに及べば、則ち遂に寒化に従う、而_{しか}れども胃氣猶守_{防備}有り、故に能く*搏實_{うちみつる}する者矣、

*参照 傷寒論述義卷第四飲邪搏聚

如茯苓桂枝朮甘草湯證、其病重、而飲停中焦者也、方氏曰、心下逆滿、伏飲上溢、搏實於膈也、氣上衝胸、寒邪上湧、挾飲為逆也・・

脈經曰、下利而腹痛、爲_二寒實_一、當下之、此語出_二其平下利中_一、攷_二前後諸條_一、似_二即雜病論之遺_一、然則本病爲_二寒實_一、其義甚明矣、蓋雜病寒疝寒脹之類、亦係_二寒實_一、故金匱腹滿寒疝證治、間與_二本篇_一相發、又寒實字面、出_二三物白散條、及腹滿篇第四條_一、

脈經曰く「下利而腹痛、爲寒實、當下之、」此語出其平下利中_{卷八平嘔吐噦下利脈證第十四}、攷前後諸條、似_二即雜病論_{金匱}之遺、然れば則ち本病は寒實と爲す、其義甚だ明らか矣、蓋し雜病_{金匱}寒疝寒脹の類、亦寒實に係わる、故に金匱腹滿寒疝證治、間_{間・たがいに}本篇と相發_{たがいに明らかにする}す、又寒實字面_{文字の表の意味}、三物白散條*、及び腹滿篇第四條**に出る、

*太陽病十四條「病在陽 應以汗解之 反以冷水瀼之 若灌之 其熱被劫不得去 彌更益煩 肉上粟起 意欲飲水 反不渴者 服文蛤散 若不差者與五苓散 寒實結胸無熱證者 與三物小陷胸湯 白散亦可服」

**金匱・腹滿寒疝宿食病脈證治第十「病者痿黃 躁而不渴 胸中寒實而利不止者 死」

其所_レ受者、有_下自_二太陽病誤下_一來_上、則其不_二誤下_一、或有_二變成者_一、及或有_下自_二少陽_一來_上者、皆可_レ知也、

其受ける所の者、太陽病誤下_下より來る有り、則_{しか}るにち其誤下にあらず、或いは變じて成る者有り、及び或いは少陽_下り來る者有り、皆知るべき也、

成氏曰、太陰病者、陽邪傳裏也、此言有_レ味、豈因_二三陰中、太陰特有_二桂枝法_一、而發乎、

成氏曰く、太陰病は、陽邪が裏に傳わる也と、此言味_{意味}有り、豈_{おそらく}三陰中、太陰特に桂枝*法有るに因_{より}て、發する乎、

*参考 述太陽篇 蓋し太陽病變じて陰を為す者、必ず多くは桂枝證に自_よる、其理何_かか、既に是表疎、之を表實者に比して、陽氣稍弱、故に其重きこと一等者、或いは溫養を須_ちいれば、則ち其變じて陰と為り易き也_や、明らか矣、

曰自利、曰吐食不下、曰時腹痛、皆寒盛之徵、曰腹滿、曰下_レ之胸下結鞭、俱壅實之驗、

曰く自利、曰く吐食不下、曰く時腹痛、皆寒盛_んの徵、曰く腹滿、曰く之を下し胸下結鞭、俱に壅實の驗_{しるし}、

所_レ謂_下之者、蓋指_二承氣十棗之類_一而言、其病不_レ似_二少陰之脫_一、故胸下結鞭、猶是崔氏所_レ謂_下後虛逆、氣毒相激之類也、胸下、蓋即心下也、太陰唯於_二末條_一言_二脈候_一、似_二不_二必其正脈_一、然要不_レ出_二沈遲細弱等_一也、

所謂之を下_す者、蓋し承氣十棗の類を指して言う、其病は少陰の脫に似ず、故に胸下結

鞭、猶是崔氏謂う所の下後虚逆、氣毒相激しきの類也、胸下、蓋し即ち心下也、太陰唯末條*に於いて脈候を言う、必ずしも其正脈にあらざるに似る、然り要するに沈遅細弱等を出ざる也、

*太陰病八條「太陰為病 脈弱 其人続自便利 設當行大黃芍藥者宜減之 以其人胃氣弱易動故也」

其初起滿實、陽氣能持者、設桂枝加芍藥、及加大黃湯、以為和泄温利之法、

其初め起こる滿實、陽氣を能く持する者、*桂枝加芍藥、及び加大黃湯を設もうけ、以て和泄温利の法と為す、

*太陰病七條「本太陽病 醫反下之 因爾腹滿時痛者 屬太陰也 桂枝加芍藥湯主之 大實痛者 桂枝加大黃湯主之」

此條、曰本太陽病、則時既離表可知、蓋誤下之後、胃氣生寒、表邪陷實、以致是證、顧下後優秘者、桂枝湯加倍芍藥、既非發表、亦與建中不同其旨、攷小柴胡加減法曰、若腹中痛者、去黃芩、加芍藥三兩、成氏曰、加芍藥以通壅、又明理論曰、宜通而塞為痛、邪氣入裏、裏氣不足、寒氣壅之、則腹中痛、芍藥、味酸苦微寒、酸性泄而利中、加之則裏氣得通、而痛自已、愚謂此方芍藥、亦取通壅、次條設當行大黃芍藥者語氣、可徵焉、張志聰侶山堂類辨曰、芍藥氣味苦平、苦走血、故為血分之藥、苦下洩、故本經、主邪氣腹痛、除血痺、破堅積寒熱、因其破洩、故太陰篇云云、今人咸云、芍藥主酸斂、而不知有大黃之功能、此說則過當矣、病勢更劇、大實痛者、加大黃以疎之、亦猶大黃附子湯之例、以病屬寒、主在温利、擴充此理、則大黃附子湯、及温脾湯等、皆宜治本病也、

此條、「本太陽病」と曰うは、則ち時既に表を離れるを知るべし、蓋し誤下の後、胃氣に寒生じ、表邪陷實、以て是證を致す、顧みるに下後優秘者、桂枝加芍藥湯は桂枝湯に芍藥を加倍三兩→六兩、既に發表に非ず、亦建中胃腸の建立と其旨を同じくもせず、攷考するに小柴胡加減法「若腹中痛者、去黃芩、加芍藥三兩、」と曰う、成氏曰く、芍藥を加ふやすするを以て壅を通ず、又明理論成無己著曰く、宜しく通ずきにして塞は痛を為す、邪氣裏に入り、裏氣不足、寒氣之を壅ふさげば、則ち腹中痛、芍藥、味酸^{黒字}苦微寒^{黒字}、酸の性^{たち}泄して中を利す、之を加えれば則ち裏氣通を得て、痛自ら已むと、愚謂う此方の芍藥、亦壅を通ずるを取もつ、次條「設當行大黃芍藥者」語氣、以て徵とすべし焉、張志聰侶山堂類辨曰く、芍藥氣味苦平、苦は血を走る、故に血分の藥と為す、苦は下洩^泄、故に本經^{神農本草經}は、邪氣腹痛を主り、血痺を除き、堅積寒熱を破る、其洩^泄を破つ^つに因る、故に太陰篇云云、今人咸^{みな}、芍藥は酸斂^おさめるを主ると云えども、大黃の功能有るを知らずと、此說則ち當^{あた}るを過^{あや}まつ矣、病勢更に劇しく、「大實痛者」大黃を加へ以て之を疎^疎通^通じ、亦猶大黃附子湯*の例、病寒に屬するを以て、主は温利に在り、此理を擴充すれば、則ち大黃附子湯、及び温脾湯^{大黃・人參・甘草・乾薑・附子(千金方)}等、皆宜しく本病を治すべし也、

*金匱・腹滿寒疝宿食病「脇下偏痛、發熱、其脈緊弦、此寒也、以温藥下之、宜大黃附子湯、」

○脈經所^謂當^下之者、亦加大黃湯證、其下利、因有寒積、而氣下墜所致、與四逆證之下利自異、要知寒實用下、於脈之有力無力、腹痛之微甚著眼、始為襯切、

○脈經謂う所の當に之を下すべき者、亦加大黃湯證、其下利、寒積有るに因りて、氣下墜致す所、四逆證の下利と自ら異なる、知識を要するに寒實に下を用いる、脈の有力無力、腹痛の微甚に著眼、始めて襪^{たすけ}の切^要と為す、

○陳氏三因方曰、太陰屬^レ脾、中州土地、性惡^レ寒濕^一、非^レ乾薑附子^一、不^レ能^レ溫燥^一、又曰、至^レ太陰脾經^一、溫燥不^レ行、亦當^レ溫利^一、自^レ陽明^一出、如^下溫脾圓、用^レ大黃^上者、是也、此其言雖^レ曖昧不^レ明、似^下稍知^三太陰之爲^レ寒實^一者^上矣、

○陳氏三因方曰く、太陰は脾に屬し、中州^{中央の地}土地、性寒濕を惡^くむ、乾薑附子に非ざれば、溫燥能わず、又曰く、太陰脾經に至る、溫燥行^{めぐ}らず、亦當に溫利すべし、陽明自より出る、溫脾圓*、大黃を用いる者の如く、是也、此其言曖昧不明と雖も、稍^{やや}太陰の寒實を爲すを知る者に似る矣、

* 溫脾湯 (千金) 大黃・人參・甘草・乾薑・附子 適応温下 (黙堂柴田良治処方集)

如其脈弱者、要^レ加^レ斟量^一、

如^もし其脈弱者、斟量^{くみはかる}を加えるを要する、

太陰爲病之爲字、疑衍、提綱諸條、及風溫之外、經無^レ此語例^一、續自^レ便利、恐是承^レ上條^一、而言、醫下^レ之後、續自^レ便利、柯氏意亦似^レ然、太陽中篇傷寒醫下^レ之、續得^レ下利^一、殆一例也、蓋此條、示^下寒實動變^レ陽虛^一、不^レ可輕下之戒^上、

太陰爲病の爲*字、疑うらくは衍^{余分}ならん、提綱^{事の主要な点を挙げたもの}の諸條、及び風溫の外、經に此語例無し、「續自^レ便利」恐らく是上條を承けて、言う、醫下の後、續自^レ便利、柯氏意亦然りに似る、太陽中篇傷寒醫下之、續得^レ下利**、殆んど^一例也、蓋し此條、寒實動き陽虛に変わる、輕^{かるがる}しく下すべからずの戒めを示す、

* 太陰病八條「太陰爲病 脈弱 其人続自便利 設當行大黃芍藥者宜減之 以其人胃氣弱易動故也」

** 太陽病中六十三條「傷寒 醫下之 続得下利清穀不止 身疼痛者 急當救裏 後身疼痛 清便自調者 急當救表 救裏宜四逆湯 救表宜桂枝湯」

病既重者、則用^レ四逆輩^一、以^レ溫^一散之^一、

病既に重き者、則ち四逆輩*を用い、以て之を溫散す、

* 太陰病五條「自利不渴者 屬太陰 以其藏有寒故也 當溫之 宜服四逆輩」

堤綱之證、蓋謂^レ此也、不^レ渴、卽與^レ少陰^一分別處、彼以^レ胃少^レ液故渴、此以^レ寒氣壅閉、津液猶持^一、故不^レ渴、成氏曰、自利而渴、寒在^レ下焦^一、自利不^レ渴、寒在^レ中焦^一、恐誤、云^レ四逆輩^一、而不^レ云^レ四逆湯^一、意在^レ溫散^一、而不^レ在^レ治^レ厥也、朱氏活人書以來、療^レ本病^一有^下用^レ理中湯丸^上者、蓋能得^レ經旨^一者矣、

堤綱^{事の主要な点を挙げたもの}の證、蓋し此^{太陰病五條}を謂う也、「不^レ渴」卽ち少陰と分別する處、彼は胃に液少なきを以ての故に渴す、此寒氣壅閉、津液猶持するを以てす、故に不^レ渴、成^{*}氏曰く、自利而渴、寒在下焦、自利不^レ渴、寒在中焦と、恐らく誤り、四逆輩と云って、四逆湯と云わざる、意は溫散に在りて、厥を治するに在らざる也、朱氏活人書以來、本病を療するに理中湯丸^{人參・白朮・甘草・乾薑}を用いる者有り、蓋し能く經旨を得る者矣、

* [成] 自利而渴者屬少陰、為寒在下焦、自利不渴者屬太陰、為寒在中焦、與四逆等湯、以溫其藏、

蓋寒實之病、雖胃猶閉持、以寒固胃之所忌、其實之極、中氣必敗、不似熱證之久實、故初起雖用溫利、至其重者、則宜扶陽散寒耳、

蓋し寒實の病、胃猶閉とさずを^{とさず}持^{まも}ると雖も、寒固^{もと}より胃の忌む所を以て、其實の極^{きわ}みに、中氣^{中焦(脾胃)の氣}必ず敗れる、熱證の久實に似ず、故に初起に溫利を用いると雖も、其重き者に至れば、則ち宜しく陽を扶^{たす}け寒を散らすべし耳、

玉函經曰、寒則散之、此之謂也、桂枝加芍藥證曰、時痛、加大黃證曰、大實痛、堤綱曰、時腹自痛、此足以知其病機、而措治之法亦見矣、

玉函經曰く、寒は則ち之を散らすと、此の謂也、桂枝加芍藥證*「時痛」と曰い、加大黃證「大實痛^{大便通ぜず間欠的に痛む「傷寒論入門」}」と曰い、堤綱^{事の主要な点を挙げたもの}「時腹自痛**」と曰う、此以て其病機を知るを足りて、治を措^{ほど}こすの法亦見える矣、

*太陰病七條「本太陽病 醫反下之 因爾腹滿時痛者 屬太陰也 桂枝加芍藥湯主之 大実痛者 桂枝加大黄湯主之」

**太陰病一條「太陰之爲病 腹滿而吐 食不下 自利益甚 時腹自痛 若下之 必胸下結鞭」

此太陰病要領也、他有兼表者、桂枝湯條、是也、

此太陰病要領也、他に表を兼ねる者有り、桂枝湯條、是也、

少陰兼太陽、治法先裏後表、太陰不似少陰之脫、且桂枝湯、程氏所謂建中之體、無碍於溫者、此所以猶先其表乎、

少陰が太陽を兼ねる、治法は裏を先に表を後にす、太陰は少陰の脱には似ず、且つ桂枝湯、程氏謂う所の建中^{胃腸の建立の體}かたちを胎^{はら}む、温めるを碍^{さまた}げざる者、此以て猶其表を先にする所のごとし乎か、

其愈、有從外者、太陰中風、是也、

其愈、外に従う者有り、太陰中風*、是也、

*太陰病二條「太陰中風 四肢煩疼 陽微陰濇而長者 為欲愈」

成氏注辨脈首條曰、陰病見陽脈、而主生者、則邪氣自裏之表、欲汗而解也、如厥陰中風、脈微浮爲欲愈、不浮爲未愈者、是也、據此說、則三陰中風、特似言其愈候、豈以風屬陽、假爲陽復之名乎、柯氏曰、脈濇與長、不並見、濇而轉長、病始愈耳、此亦一說、

成氏注*辨脈首條曰く「陰病見陽脈」而^{すな}わち生を主る者なれば、則ち邪氣が裏^{より}表に之^{いた}る、汗を欲して解する也、「厥陰中風、脈微浮爲欲愈、不浮爲未愈」^{厥陰病二條者}の如く、是也と、此說に據れば、則ち三陰中風、特に其愈る候を言うに似る、豈風は陽に屬するを以て、假に陽復の名を爲す乎、柯氏曰く、脈濇と長とは、是並^{そろ}つては見^{あら}われず、濇にして轉長、病始めて愈る耳と、此亦一說、

*辨脈法第一の一條「・・・凡陰病見陽脈者生、陽病見陰脈者死、」に対する成無己の文は以下の如し

〔成〕陰病見陽脈而主生者、則邪氣自裏之表、欲汗而解也、如「厥陰中風脈微浮爲欲愈、不浮爲未愈」厥陰病二條者、是也、陽病見陰脈而主死者、則邪氣自表入裏、正虛邪勝、如「識言妄語・・・脈沈細者死、」傷寒例廿三是也、

有從內者、暴煩下利、是也、

内に従う者有り、暴にわかになりに煩し下利*、是也、

*太陰病六條「傷寒脈浮而緩 手足自温者 繫在太陰 太陰當發身黃 若小便利者 不能發黃 至七八日 雖暴煩下利日十餘行 必自止 以脾家實 腐穢當去故也」

此條舉客以明主、太陰當發身黃以上、是客詞、此太陰非謂寒實本病、唯是指中焦脾家而言、猶下食穀欲嘔者屬陽明之例上、即言下脈浮緩、手足自温、小便利者、爲中焦濕熱、故當上發身黃也、若小便利以下、是主詞、言寒實本病、倘脈浮緩、手足自温者、爲陽復寒去之兆、縱有首條諸證、及小便利、必暴煩下利日十餘行而愈、即是脾家陽實、寒積腐穢自去之徵也、若小便利、不能發黃二句、在陽明篇、則爲燥結之驗、在本篇、則爲裏寒之故矣、以上一出臆見、甚似迂曲、然參互審攷、義不得不然、何則金匱黃疸篇、以寸口脈浮而緩、爲其正脈、是與本條相發、可知浮緩非表邪而屬裏熱、蓋裏熱外熏、而脈浮者、白虎證是也、緩之爲熱、見素靈及平脈法、手足温一證、小柴胡梔豉兩條有之、亦係內熱所致、是知下此脈證、在陽病見之、則爲裏熱之候上、陽明篇舉以別胃實燥濕之分也、今寒實而見之、何以謂爲陽復之候、曰、少陰篇曰、少陰病脈緊、至七八日、自下利、脈暴微、手足反温、脈緊反去者、爲欲解也、雖煩下利、必自愈、此明以手足温爲愈候、而錢氏解緊去、謂緊峭化而爲寬緩、此意甚佳、且少陰厥陰、並以脈浮爲欲愈、乃知下此脈證、在陰證見之者、固與陽證不同、要之本篇此條、揭此脈證、以辨明濕熱發黃、與寒實愈候耳、又太陽下篇、及辨脈法、有以手足温爲愈候者上、亦當併攷、

此條*客を擧げて以て主を明らかにす、「太陰當發身黃」以上、是客詞、此の太陰は寒實本病を謂うに非ず、唯是中焦脾家を指して言う、猶「食穀欲嘔者、屬陽明**」の例のごとし、即ち脈浮緩、手足自温、小便利者、中焦濕熱と爲す、故に當に身黃を發すべしと言う也、小便利以下の若き、是主詞、寒實本病を言う、倘もし脈浮緩、手足自温者、陽復かえり寒去るの兆きざしと爲す、縱たとえ首條諸證、及ともに小便利有つても、必ず暴にわかになりに煩下利日十餘行にして愈ゆ、即ち是脾家陽實、寒積腐穢自ら去るの徵也、「若小便利者、不能發黃」二句、陽明篇***に在れば、則ち燥結の驗しるしと爲し、本篇に在れば、則ち裏寒の故と爲す矣、以上一に臆見オクケン・あて推量の考へを出つくる、甚だ迂曲曲がりくねっているに似る、然れども參互まじえしらべる審攷シンコウ・しらべる、義然らざるを得ず、何となれば則ち金匱黃疸篇「寸口脈浮而緩・・・」を以て、其正脈と爲す、是本條と相發互いに明らかにするす、浮緩は表邪に非ずして裏熱に屬するを知るべし、蓋し裏熱外熏、而しかして脈浮者、白虎證是也、脈緩之れを熱と爲す、素問靈樞及傷寒論平脈法に見る、手足温一證、小柴胡梔豉兩條之れ有り、亦内熱致す所に係わる、是此脈證、陽病に在って之を見れば、則ち裏熱の候と爲すを知る、陽明篇擧げ以て胃實燥濕の分と別解する也、今寒實にして之を見るに、何を以て陽復の候と爲すと謂うか、曰く、少陰篇七條曰「少陰病脈緊、至七八日、自下利、脈暴微、手足反温、脈緊反去者、爲欲解也、雖煩下利、必自愈、」此明らかに手足温を以て愈るの候と爲して、錢氏緊去るを解し、緊峭シヨウ激化して寬緩を爲すと謂う、此意甚だ佳よい、且つ少陰厥陰、並み

脈浮を以て愈んと欲すると爲す、乃ち此脈證、陰證に在り之を見あらわす者、固く陽證と同じからざるを知る、之を要するに本篇此條、此脈證掲げ以て、濕熱發黃と、寒實愈る候とを辨明する耳、又太陽下篇、及び辨脈法、手足溫を以て愈る候と爲す者有り、亦當に併攷すべし、

*太陰病六條「傷寒脈浮而緩 手足自溫者 繫在太陰 太陰當發身黃 若小便自利者 不能發黃 至七八日 雖暴煩下利日十餘行 必自止 以脾家實 腐穢當去故也」

**陽明病六十一條「食穀欲嘔 屬陽明也 吳茱萸湯主之 得湯反劇者 屬上焦也」

***陽明病八條「傷寒脈浮而緩 手足自溫者 是為繫在太陰 太陰者 身當發黃 若小便自利者 不能發黃 至七八日 大便鞭者 為陽明病也」

抑病既在裏、故無所復傳、唯自實而虛、必變爲少陰、
抑^{そもそも}病既に裏に在り、故に傳わる所無し、唯實自よりして虚へ、必ず變じ少陰を爲す、
義如上説、
義上説の如し、

更^下有寒去而實存、實以生燥、仍變陽明者、
更^更に寒去りて實存^{たもつ}、實以て燥を生む、仍^よつて陽明に變ずる者有り、

陽明篇第三十二條、若不轉失氣者、初頭鞭後必澹、此蓋與^下欲作固瘕者^上、均屬寒實、故攻之、則脹滿不能食也、其後發熱者云云、乃言^下有寒去之後、或變熱結者^上、

陽明篇第三十條*「若不轉失氣者、初頭鞭後必澹、」此蓋し固瘕**を作^なさんと欲する者と、均^{ひと}しく寒實に屬す、故に「攻之、則脹滿不能食也・・其後發熱者云云、」乃ち寒去るの後、或いは熱結に變ずる者有るを言う、

*陽明病三十條「陽明病 潮熱大便微鞭者 可與大承氣湯 不鞭者不可與之 若不大便六七日 恐有燥屎 欲知之法 少與小承氣湯 湯入腹中 轉失氣者 此有燥屎也 乃可攻之 若不轉失氣者 此但初頭鞭後必澹 不可攻之 攻之必脹滿不能食也 欲飲水者與水則噦 其後發熱者必大便復鞭而少也 以小承氣湯和之 不轉失氣者 慎不可攻也」

*陽明病十二條「陽明病 若中寒者 不能食 小便不利手足濇然汗出 此欲作固瘕^{容易に治癒し難い慢性下利} 傷寒論入門 必大便初鞭後澹 所以然者 以胃中冷 水穀不別故也」

至^下如厥陰之燥熱、則恐非寒實之遽變者^上也、
厥陰の燥熱の如きに至れば、則ち恐らく寒實の遽^{わか}かに變ずる者には非ざる也、

太陰一篇、從無確解、愚涵泳數年、徵之病者、定爲寒實、後得脈經中語、竊謂益爲著切、因不自揣、立説如右、蓋本篇不^下過僅僅數條、而陽明篇中、反多本病證候、此以下其病雖有寒熱之異、而部位與壅實則同^上、故恐人錯認、對舉明之也、曰、不能食名中寒、曰、欲作固瘕、曰、攻其熱必噦、曰、欲作穀疸、曰、飲水則噦、曰、食穀欲嘔、曰、寒濕在裏、皆是已、然猶冒以陽明、故諸家未^下之察、^上友世緝嘗特論之、唯未斷爲寒實、稍與愚見異焉、金鑑、以厚朴生薑半夏甘草人參湯、移入本篇、其候雖類、彼則氣滯虛滿耳、實不同也、柯氏以三物白散移入、亦不^下辨部位之有^上殊者也、

太陰一篇、従がうに確かな解無し、愚涵泳游泳・あそびおよぐ數年、之を病者に徴もとめるし、定めて寒實と爲す、後に脈經中の語を得て、竊せつに謂おもうに益益・ますます著あきらかな切かなめと爲す、因って自ら揣さだめるをせず、説を立てるに右下の如し、蓋し本篇太陰篇僅僅數條を過ぎず、而しかして陽明篇中、反って本病證候多し、此其病は寒熱の異有りと雖も、部位と壅實と則ち同じを以てす、故に人錯認あやまりを恐れ、對ならび擧げて之を明らかにする也、曰く、不能食を中寒と名づける、曰く、固瘕を作さんと欲す、曰く、其熱を攻めれば必ず嘔す、曰く、穀疸を作さんと欲す、曰く飲水すれば則ち嘔す、曰く穀を食し嘔を欲す、曰く寒濕裏に在り、皆是ここで已とめる、然れども猶冒するに陽明を以てす、故に諸家未だ之を察せず、ㄩ友世緝*嘗て特に之を論ずも、唯未だ斷ずるに寒實とは爲さず、稍愚見と異なる焉、金鑑、厚朴生薑半夏甘草人參湯**を以て、移して本篇に入れる、其候類似ると雖も、彼は則ち氣滯虛滿耳、實實際は同じからず也、柯氏は三物白散***を以て移入、亦部位の殊ことなる有るを辨ぜざる者也、

*先友父の友 (多紀元簡) 軒邨寧熙字世緝シユウ のきむらやすひろ 参照卷一叙述

**太陽病中三十六條「發汗後 腹脹滿者 厚朴生薑半夏人參湯主之」

***太陽病下十四條「寒實結胸、無熱證者、與三物小陷胸湯、白散 (桔梗・巴豆・貝母バイモ) 亦可服、」

完 2009/10/31